

## 結核に対する補助的な灸療法; 無作為化臨床試験による潜在的有効性と安全性の比較の調査

[キーワード]: 灸、結核、HIV、多剤耐性結核 (MDR-TD)、免疫調節、免疫療法、無作為対象化試験 (RCT)

Hood Ahmed Ibanda(a)、Frank Mubiru(a)、Rogers Musiba(a)、Sachiko Itaya(b)、Jenny Craig(b)、Merlin Young(b)、Paul Waako(a,c)

a: Department of Pharmacology and Therapeutics, Makerere University, Kampala, Uganda

b: Moxafrica, United Kingdom

c: Busitema University, Mbale, Uganda

### [要約]

概要: 米粒大の直接灸は、抗生物質が使われる前の日本において結核症に使われていた事が知られており、科学的な動物実験において効果的であると報告されている。抗菌性耐性 (AMR) 疾患は、抗生物質の効かない結核と共に世界的に健康への脅威として特にアフリカやアジアで大きな問題と発展している。この研究は、この単純で伝統的な治療法が中所得から低所得国において結核の継続的な負担を軽減するのに役立つかどうかを示す最初の科学的調査となる。

方法: 180 人の新たに診断された結核患者を無作為に 2 つの群に分け、一つの群は最初の選択肢として与えられる結核の標準治療でもある短期結核薬療法 (DOTS、WHO に推奨される結核治療) を、そしてもう一つの群は DOTS に加え毎日、自己による灸療法を行った。この 2 つの群は、回復具合、血清学的で免疫学的なマーカーの違いを比較し、注意深く観察された。

結果: 灸療法を行った群は、結核薬療法 (DOTS) のみを行った群よりも早く薬物療法に反応を示した、と喀痰陰性 ( $P=0.032$ 、初月) により計測された。それには、HIV 陽性であったサブ群の結核患者でみられるのと同じ「P 値」と、同様の統計学的有意性 ( $P=0.003$ ) である「ヘモグロビン値」の改善が付随されていた。また、灸患者は統計学的にも、薬物療法に積極的に取り組む事も報告されている ( $P=0.001$ )。

結論: HIV と同時感染している場合も含め、灸療法の効果は、感染力の低下および薬物療法への取り組みの積極性の両面に対して実証された。過去には幅広い血液学的効果についての報告がなされていたにもかかわらず、今回の調査ではヘモグロビンの増加という報告に限られた。前回の事例の証拠に反して、灸療法の使用が患者の生活の質 (QOL・カノフスキースコア) を改善させるという証拠はなかった。

この論文では、人間の肺結核症 (HIV との同時感染の有無に関わらず) を治療する際、灸療法の効果と潜在的な効能の両方のより広い理解を提供する為にも、より多くの調査を行うべきであると結論づける。これらは MDR-や XDR-(複数の薬剤耐性および広範囲薬剤耐性) およびプログラムの治療ができない結核 (緩和ケアシナリオを含む) を含むべきであることをさらに推奨する。